

III 回 想

〈講究録のことなど〉

國澤 清典

戦争はますます熾烈を増してきた昭和19年12月統計数理研究所の仮庁舎であった上野の一角にある学士院の門をくぐった。偉い先生達の出入する学士院だけに、いささかの興奮をおぼえた。研究室は河田龍夫先生と同室だったことも、殊の外嬉しかった。敗戦色濃厚な時局にもかかわらず、研究所の皆さんは元気潑刺として活気に溢れていた。翌年の3月10日の東京大空襲を境に疎開することになり、信州飯田に移った。吉野館という旅館と下伊那教育会館が疎開先だった。飯田では皆さんと家族ぐるみのお付合をしていただき、苦しかったが今では楽しい思い出ばかりだ。教育会館で地域の人達に公開講座を開くことになった。私の番になって教育会館に行くと、1人のみの聴講者がぼつねんと座っていた。次回の講義の日に行くと、その方は出征令状が来たので残念だが出席できないという。これで私の講座は打切りとなった。その方は松島勝郎といって小学校の先生だった。その後復員され、文通は現在に迄続いている。

終戦となり、高田老松町の細川邸が庁舎となる。豪華な庁舎だけに、仮庁舎という気持が余計にして落ちつかなかった。この時代では講究録が唯一の研究発表機関紙だっただけにくやしい思いをしたのは私だけでなかった。講究録は著者各自がガリ版刷りをした。当時は野球をするにもグローブを布で手製という時代だったから仕方がない。だから業者のつくるガリ版刷りとちがってやぼったい感がしたが個性は溢れていた。私も自己流にガリ版刷りをしたが、きたないガリ版など誰も読んでくれないと思っていた所、思いがけなく北川敏男先生から手紙を頂き、typical function に関するご意見だった。とにかくすべての物がなく、貧しい時代だったが講究録にはなつかしい思い出がある。昭和19年7月15日に創刊号が出て、昭和28

年3月26日の8巻12号が最終号となっている。

〈統数研の創成期〉

林 知己夫

ものごとの創成期はゲマインシャフト的で実に面白いものである。研究所もそうであった。「数理統計学」か「統計数理（disciplineとしての）」かの激しい議論が毎日のように繰り返され、その理念の下に夫々研究を進めていた。「統計数理の哲学は別として具体的に何も生まないではないか。数理統計学には、はっきりした成果がある。これを積み上げるのが学問の向上だ」という言い分が「数理統計学」の方であった。一方「統計数理」の方は、根本から考え直さないとまっとうな学問は出来上がらない、そこから考えて行き成果を生み出して行くのが、我々の研究なのだと考えていた。

言うまでもなく私は「統計数理」の方である。統計数理とは何なのか。統計的に問題を解決しようとするとき「まず何が肝要であるかを見抜き、これをフォーミュレートし、実験や調査の計画をたて、この下にデータを獲得し、分析し、予測し、行為の指針を得ることを志向する。これらに関する方法的成果はもとより、これを編み出すまでの全過程を包含するものである」と考えたのである。理論・応用の区別のない、ともに融合した姿が統計数理なのであるというのが旗印であった。

二つの行き方は、夫々成果を競ったのであるが、結果の大勢は誰の目にも明らかであった。佐々木達治郎所長の決断で、研究所の方向が定まり、研究体制が整えられた。それは「実際に即して……の研究を行う」という形でながく統計数理研究所の省令規定に残っていた。（時の経過と共に本来の精神は忘れられたとしても）。今日では考えられない行政整理による研究所の解体・吸収の嵐をくぐり抜け、研究所は発展した。所員の活躍と歴代所長の醸し出すおおらかな研究業績評価の雰囲気によるところが大きい。

統数研が50年経過し得たのは、常に現象をとらえ、要望にこたえて方法それ自身を作り変えてきたからである。常なる自己脱皮・自己創造なくしては研究所に明日はない。これが50年の歴史のうちに学ばれることである。

統計数理研究所が創立された昭和19年6月5日は、前の戦争が始まってから約2年半後で、未だ戦争の最中であった。この頃になると全国的に物資が不足してきて、日常生活に必要なものも手にいれるのが不自由になった。研究所も庁舎の新築はできず、上野公園内にある学士院の建物の一部を借りて発足した。人員のほうは、先ず所長は掛谷先生が兼任で発令されたが、7月末迄には3人（河田、坂元、松下）の専任所員が発令された。

当時の有様を思い起こすと、研究所として必要な物品が整備されているとはとてもいえない状態であった。机、椅子などは学士院のものを借りたが、その他の図書類、器材を集めるのは大変であった。私自身も8月の暑い日に、会計課長（当時学士院の会計課長が兼任）と一緒に上野から横浜迄中古のタイプライターを買いに行ったことを覚えている。こんな状態は、その後飯田に疎開した時も、また終戦後東京に戻り細川邸内に暫く居た頃も、大して変わりは無かった。しかしこのような環境においても各所員は研究に励んだ。よい研究成果を挙げて発表することが研究者として認められることになり、ひいてはそれが研究所の存在を内外に示すことになるのである。その頃行われた研究の成果の一部は、しばらくして発刊された欧文誌アナリスに発表されている。このアナリスはその後次第に外国でも認められ、今日多くの外国の著名な大学、研究機関に置かれている。それにしても当時の物資、文献の少ない時代は、今日のような物の豊かな、情報量の多い時代に比べ、そう言ったものに振り回されることもなく、研究者として「考え九分、本読み一分」と言う（に近い）姿勢を保つするには、かえってよかったのかも知れない。

昭和25年4月から統計数理研究所の第三部に勤めることになり、初めて東京都世田谷区の三軒茶屋に行くことになりました。

研究所の建物は、旧連隊の兵舎内の将校集会所で古いおんぼろの木造です。私の研究室は、その一室ですが、窓から外を見ると、すぐ下に便所が見えていました。これから毎日研究をするのかと思う

と、殺風景で落ち着いて勉強ができるかどうか心配しました。

所長は、窪田忠彦先生で挨拶をしましたが、先生は幾何学が専門で、戦争中、特殊爆弾の弾道について研究をされておられ、某所で沢山の女性が丸善計算機を使って計算しておりました。私も初めて手動計算機を見て一緒に計算したこともありました。先生とは、この頃から御縁があったのでしょうか。

戦後、学校で数学を教えてきましたが、急に統計学の研究に変えるわけで、統計学の先輩の松下嘉米男氏、水野坦氏、林知己夫氏に挨拶し、いろいろ指導をしてもらいました。

先ずサンプリングから勉強をしようと思い、かなり沢山の統計学の論文のコピーを読むことから始めました。後からみると読んだ論文のメモを書いたノートは8冊になっていました。

暫くして研究室には釣谷純子さんが補助員として入られ、統計学の本として、イギリスのケンドルの厚い2冊の本の一部をノートに書いてもらいました。現在ならコピー機で直ぐ写すことができるのに、当時は、大変な苦勞と費用がかかりました。

論文や本を読んでいる時の休憩中、窓を開けていると便所に入出入りする人が気になり、人数を勘定してポアソン分布のデータを集めた時もありました。

これらが勤め始めた頃の日々の仕事でした。